

Masuda, T., & Nisbett, R. E. (2001). Attending holistically vs. analytically: Comparing the context sensitivity of Japanese and Americans. *Journal of Personality and Social Psychology*, 81, 922-934.

本論文は、呈示された視覚画像への注意、記憶に、日本と北米で明確な文化差があるのかを検討したものである。それまでの社会心理学の知見では、社会的場面の原因帰属や態度推論を行う際、日本人は北米人比べて出来事を中心人物の行動のみならず、状況要因まで考慮に入れる傾向が強いということが報告されてきた。しかしこの傾向は、あくまで社会心理学的な意味でのみあらわれる現象であると解釈されており、与えられた視覚情報のどの点に注意を向けて情報を取り込み、また記憶するかというようなか基本的な心理過程にまで文化差が表れるのかどうかについては十分検討されていなかった。そこで、まず実験1では、同一の情報を呈示した場合でも、その内容の説明に文化差が生じるのかを検討する。たが、20秒間の水中の風景のアニメーションを参加者に呈示した後で、どんな動画であったかを口頭で説明してもらい、その内容を分析した。結果は、日本人は、まず風景の情景を説明し、その後中心に目だった魚について言及する傾向が強いのに対し、アメリカ人は、とりわけ中心に目だった魚について言及し、それ以外の状況要因については少ないというものだった。実験2では、視覚情報の取り込みの段階で、日本人はアメリカ人よりもターゲットとなる物体をその背景とともにエンコードするのではなくかと思われ、野生動物に自然の風景を付けた画像を用いた実験を行った。この実験の第1フェーズでは後から再認課題があることを説明せずに参加者に画像の中の動物の好き嫌いを評定してもらい、第2フェーズになってはじめて再認課題があることが教示し、その後、第1フェーズで見た動物に、オリジナルの背景あるいは新規な背景と組み合わせて呈示した。この際、判断は背景を無視して、呈示された動物を第1フェーズで見ただろうかのみ判断してもらった。結果は、背景を無視するようには教示したにもかかわらず、日本人、アメ

リカ人とともに，動物が新規の背景と組み合わせられている場合の方が，オリジナルの背景と組み合わせられている場合に比べて再認率が低かったが，その落ち込みの程度は日本人のほうが大きいというものであった。この違いは，日本人はアメリカ人と比べ視覚情報の処理の初期の段階から状況要因を強く考慮に入れる傾向が強いということを示唆するものである。本論文は，文化が心理プロセスに与える影響は，知覚，認知プロセスにまで及ぶという可能性についての議論を提唱し，社会心理学と知覚，認知心理学のアプローチの統合を試みたという点で評価され，ミシガン大学・最優秀大学院生研究賞の受賞に至った。また，この研究内容とアニメーション画像は，いくつかのアメリカの社会心理学の教科書に掲載されている（Myers&Spencer, 2010 (Social Psychology, 3rd ed.); Girovich, Keldner, & Nisbett, 2006 (Social Psychology.)). 一般読者むけの情報としては，ニューヨークタイムズ紙の科学欄の記事において研究結果が紹介されている（Goode, E. (2000). How culture molds habits of thought. *New York Times*, August 8, 2000）。

Nisbett, R. E., & Masuda, T. (2003). Culture and point of view. *Proceedings of the National Academy of Sciences of the United States of America*, **100**, 11163-11175.

本論文は，注意の向け方についての文化比較研究をレビューし，中国，韓国，日本といった東アジア文化圏には物事全体をとらえようとする包括的注意傾向を促進するような文化環境が形成されているのに対し，アメリカ，カナダといった北米，西欧文化圏では，出来事を中心になる物は何かに注意をむけ，それ以外の情報との差異化をする分析的注意傾向が促進されるような文化環境が形成されているということ論じた。包括的注意傾向の特徴としては，(a) 物事の関係性に着目した分類をする（例えば牛と牧草と鶏のひとつを仲間はずれにして，二つをグループにするよう指示すると，鶏を仲間はずれにして，牛と牧草の関係性が強いとしてペアにする），(b) 物事の状況要因を考慮する（例えばアニメーション画像の背景も中心になる物体と同様に着目する），(c)

物事を状況に埋め込んで捉える（例えば、写真撮影のときに背景をいれるなど）、という点が挙げられる。そして、こうした傾向を促進する文化環境として、日常生活の中で多くのものが複雑に配置された東アジア的な文化環境や、視覚表象（絵画、写真など）が一役を買っているという点を指摘した。一方、分析的注意傾向の特徴としては、(a) 物事を共通の属性によって分類する（例えば牛と鶏は同じ動物なので同一カテゴリーにいれ、牧草とは区別する）、(b) 物事を中心テーマにのみ着目する（例えばアニメーション画像のなかで目立ったものだけに着目し、背景への関心が薄い）、(c) 物事を中心テーマを状況から際立たせて捉える（例えば、写真撮影のとき人物を大写しにする）、という点が挙げられる。そして、北米、西欧文化圏の視覚表象や物理的文化環境が、複雑さを避けて図と地を際立たせることを強調するような傾向にあるという点を指摘した。そして心の仕組みと文化の研究は、厳密な知覚、認知心理学的な実験によって実証されると同時に、心の仕組みを離れた文化環境の構造をも考慮しながら進めていくべきであることを論じた。本論文はその後、2回のブック・チャプター・リプリントの依頼を受けている（Nisbett, R. E., & Masuda, T. (2007). Culture and point of view. *Intellectica: Revue de L'Association pour la Recherche Cognitive*, 2-3: 46-47, 153-172; Nisbett, R. E., & Masuda, T. (2006). Culture and point of view. In R. Viale, D. Andler, ad L. Hirschfeld (Eds.), *Biological and Cultural Bases of Human Inference* (pp. 49-70). Mahwah, New Jersey: Lawrence Erlbaum Associates)。

Masuda, T., Ellsworth, P., Mesquita, B., Leu, J., Tanida, S., & Veerdonk, E. (2008). Placing the face in context: Cultural differences in the perception of facial emotion. *Journal of Personality and Social Psychology*, 94, 365-381.

本論文では、注意の向け方についての日本と北米、西欧の間の文化差は、ターゲットとなる人物の感情の読み取りの際にも表れるのかどうかを検討した。

過去の文化心理学研究の知見では，日本人はアメリカ人よりも状況要因に注意を向けやすい傾向があることが指摘されていた。しかし，人の表情から感情を読み取る際に，状況要因が影響を及ぼすかについては，わずかな研究例を除いて十分な検討がされてこなかった。その原因のひとつは，表情の読み取りをする際の実験刺激のほとんどが，一人のモデルの顔だけを示すことにあったと考えられる。そこで，実験1では，ある明確な感情（怒り，悲しみ，喜び）を表出したモデルを中心に配し，その周囲に同じように表情を表出した4人のモデルを配したカートゥーン的人物の画像を用意し，日本人とアメリカ人に，中心の人物の表情がどのような気持ちでいるか，そしてその気持ちの度合いはどの程度かを評定してもらった。その結果，日本人が中心のモデルの表情から気持ちを判断する場合，周囲の人物の表情の影響を強く受けることがわかった。例えば，中心人物の喜びの度合いは，周囲の人物が悲しみの表情を見せている場合よりも，喜びの表情を見せている場合のほうが，大きいと判断された。一方，アメリカ人にはこのような結果は見出せず，周囲の人物の表情に関わりなく，中心のモデルの表情が同じ場合と判断していた。実験2では，日本とカナダ，オーストラリア，ニュージーランド，英国，米国の参加者を対象として実験1を追試し，さらに課題遂行時の眼球運動をアイトラッカーで測定した。その結果，アメリカ人以外の北米人，西欧人を含めた場合も，実験1と同様の結果がみられることが確認され，また眼球運動の結果から，日本人の15%の注視は，背景の人物に向けられていたのに対し，北米，西欧人が背景の人物に注視する度合いはわずか5%に過ぎないことがわかった。本研究は，表情研究の分野に表情判断時の状況要因が示す役割を考慮に入れた研究の重要性を指摘すると同時に，文化によって感情の読み取りにはシステムティックな違いがあることを示唆している。本論文についてニューヨーク・タイムズ紙からインタビューを受け，その内容は科学欄において記事掲載された（Nagourney, E. (2008). East and West part ways in test of facial expressions. *New York Times*, March 18, 2008）。

Masuda, T., & Kitayama, S. (2004). Perceiver-induced constraint and attitude attribution in Japan and the US: A case for the cultural dependence of the correspondence bias. *Journal of Experimental Social Psychology*, 40, 409-416.

本論文は、他者の行動を観察した際に、どの程度状況要因を考慮に入れて態度推論を行うかについて日米国際比較を行った研究である。欧米で行われた過去の社会心理学の知見では、態度推論の際には、たとえ明らかなる状況の制約がある場合であっても、ターゲットとなる人物の行った行動（例えば、エッセイでフランスの核実験実施について賛成する意見を表明する）とその背後にある真の態度（本当に核実験実施を支持している）との間には対応関係が予想されるため、状況要因を無視してしまいがちであるという心理バイアスがあるとされる。この心理バイアスは、“根本的帰属エラー”あるいは“対応バイアス”といわれ、そもそも人間に備わっているバイアスとして議論されることが多かった。しかし、多くの比較文化心理学、文化心理学の知見によれば、中国、韓国、日本といった東アジア文化圏の人々は、出来事の起った状況を考慮に入れながら思考する傾向が強いと報告されており、もしそうならば、東アジア文化圏の人々は“対応バイアス”を示す傾向が欧米文化圏の人々に比べて弱いということが予想できる。このことを検証するため、まず、実験1では、まったく制約がなく、ターゲットとなる人物がエッセイを自由に書いて意見を表明した場面と、研究者がエッセイの立場を決定するという社会的制約の下で、ターゲットとなる人物がエッセイを書いた意見を表明した場合に、参加者が行動と真の態度の関係をどのように解釈するかを比較した。その結果、日本人もアメリカ人も社会的制約のある条件でも、ターゲットとなる人物はエッセイの内容と対応した態度を持つていた。この結果が示唆するところは、従来の実験パラダイムに則った場合は、日本でもアメリカでも“対応バイアス”は見出せるというところである。実験2ではエッセイそのものを実験者が用意して、参加

者には、二つの異なる態度を表明したエッセイを参加者に選んでもらい、その後このエッセイをビデオの前で読み上げた第三者がエッセイのテーマについて本当はどのような態度を持っているかを評定した。その結果、こうした明らかでない制約のあつた場合、日本人参加者の“対応バイアス”はまっただけでなく消失したのに対し、アメリカ人参加者はこのようないくつかの状況においても“対応バイアス”を強く表すことがわかった。このような結果から、“対応バイアス”に文化差があるかどうかを検討する場合には、様々な形で社会的制約の度合いを操作することが重要である点と、実験パラダイムのデザインそのものが議論の要である点と、またバイアスを起こす要因であることが議論された。

Masuda, T., & Nisbett, R. E. (2006). Culture and change blindness. *Cognitive Science*, 30, 381-399.

本論文は、知覚心理学で議論されている“チェンジブラインドネス”という現象についての日米文化比較を行った研究である。過去の知見では、人は二つの類似した画像が短い時間で交互に呈示された場合、たとえ二つの画像に明らかでない違いがあつた場合でも、それに気がつくのが極めて遅く、時として画像の中心で起つた変化にすら気がつかないことがあつたことが指摘されている。とくに二つの画面を短い時間で交互に呈示するという研究手法は、“フリッカー課題”とよばれ、“チェンジブラインドネス”研究の主要な手法として用いられている。しかしながら、過去の比較文化心理学の知見から、状況要因を考慮に入れがちな東アジア文化圏の人々は、とりわけ呈示される画像の中心課題でない情報の変化について、すばやく見つけることができるとはなつかないという予想が可能である。このことを検証するため、日本人とアメリカ人を対象として“フリッカー課題”を用いた三つの実験を行った。この際、画面のどこに変化がおこるかについて、中心情報が変化する場合と周辺情報が変化する場合の2パターンの実験刺激を用いた。結果は、どの実験においても、日本人はアメリカ人に比べて、周辺情報の変化を見つ

メを結力ほう違に場探こ況、いの  
ア変化なり、画像的の。状況、  
方の明ア時間画像日本人的。状、  
。情報は、人の、場合、に、論密こ、  
得ない、日本の、場、に、議、  
をとつ、て、の、場、に、を、  
を、と、つ、て、の、場、に、を、  
果、中、か、わ、つ、か、と、か、の、つ、こ、象、行、神、  
う、ど、す、化、に、リ、カ、と、カ、の、つ、こ、象、行、神、  
い、ど、す、化、に、リ、カ、と、カ、の、つ、こ、象、行、神、  
と、ど、す、化、に、リ、カ、と、カ、の、つ、こ、象、行、神、  
い、ど、す、化、に、リ、カ、と、カ、の、つ、こ、象、行、神、  
速、に、速、つ、つ、つ、つ、つ、つ、つ、つ、つ、つ、つ、つ、  
が、人、が、か、情、づ、つ、つ、つ、つ、つ、つ、つ、つ、  
間、本、の、な、る、わ、ま、る、に、周、い、る、社、会、認、知、的、  
時、日、す、れ、な、ど、す、心、と、て、社、会、認、知、的、  
応、が、出、ら、と、か、と、索、中、心、は、知、れ、心、理、  
反、人、が、得、ら、と、か、と、索、中、心、は、知、れ、心、理、  
す、カ、つ、が、中、同、度、を、像、は、を、研、究、の、行、文、  
出、り、見、果、人、ぼ、程、い、画、合、索、の、下、現、た、イ、